

三

木

ひろし  
博

学位の種類 博士(教育学)

学位記番号 教博第31号

学位授与年月日 平成5年12月8日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科(博士課程後期3年の課程)  
教育学専攻

学位論文題目 個性化思想の教育学的考察 - C. G. ユング論攷 -

論文審査委員 (主査)  
助教授 笹田博通 教授 沼田裕之  
教授 寺田 晃

## 論文内容の要旨

1. 本論文は、ユング (Jung, Carl Gustav 1875-1961) によって展開された「個性化」(Individuation) 思想が、精神医学、深層心理学、心理療法等の分野においてのみならず、人間形成論の領域においても有意義なものであることを、とりわけユングの治療関係論、自然観・生命観の検討によって確証するとともに、解釈学的な視点から、ユングの個性化思想が占める精神的な位置を解明しようとしたものである。
2. 論文の構成は次の通りである。

### 緒論

#### I. 本論攷の主題

#### II. 研究史上の位置並びに方法論

### 第1章 教育における〈治癒〉

—心理療法モデルの視点から—

### 緒言

#### 第1節 問題領域としての〈治癒〉

#### 第2節 自己生成と〈治癒〉

#### 第3節 関係における〈治癒〉

## 第2章 「自己」の位相

—個性化について—

緒言

第1節 「自己」観の淵源

第2節 自我と「自己」

第3節 「自己」の諸相—個性化

## 第3章 個性化原理と元型論

緒言

第1節 元型論の視座

第2節 元型的位相としての《母》

第3節 子供元型と個性化

## 第4章 個性化論における想像力の意義

—《能動的想像》を巡って—

緒言

第1節 臨床の論理

第2節 個性化と想像力

第3節 《能動的想像》の特質

## 第5章 自然理解の諸相

—《LICHT DER NATUR》を巡って—

緒言

第1節 根源的自然と《能動的想像》

第2節 元型論と《自然の光》

第3節 心理療法とヘルメス学

## 第6章 構造としての《治癒》

—心身論の視点から—

緒言

第1節 心身の形而上学

第2節 個性化論の陰影

第3節 個性化論の心身観

第4節 構造としての《治癒》

## 第7章 深層自然学の光芒

—ユングと1930年代・ヨーロッパ—

緒言

第1節 純粹自然の元型性

## 第2節 1930年代・ヨーロッパ

### 第3節 『心理療法の現在の位置』を巡って

#### 終章

##### I. 各章の論点整理

##### II. 論攷全体の総括

3. 著者は、先ず緒論において、本論文での目的とそれを追求するさいの構成について説明するとともに、従来のユング研究の動向（古典派・発達派・元型派）をふまえつつ、本論文の考察における方法論的特質が、解釈学、存在論（ロムバッハ）、形態学（ゲーテ）等の視点を取り入れたことにあると主張する。

第1章では、本論文の構想の全体にかかわる「治癒」（Heilung）の問題が取り上げられ、通常の間人形成モデルとは異質な「治癒」と教育との接点が、ユングの心理療法モデル、すなわち分析心理学の発想をてがかりにして究明される。そのさい、自己教育ないし「自己形成」（Selbstbildung）こそが教育の究極的な在り方であり、また自己教育の本質は自己治癒の論理のうちに求めらる、といった仮説が立てられ、そこから、自己治癒の過程としての「自己生成」（Selbstwerdung）・自己実現に言及される。著者によると、「治癒」という現象が人間形成において有する意義は、「自己生成」に関する考察を通して明らかになるが、その場合「自己生成」とは、自己「から」の離脱と自己「へ」の還帰、すなわち「超越-内在」に基づく「自覚」の運動を意味する。そして、この「自覚」は自己関係・他者関係の自覚であると同時に、自-他関係を包摂する「場所」的關係の自覚でもあり、したがって、「治癒」と教育（自己形成・自己生成）との接点は、「関係性」自体に具わる治癒機能のうちに見出されう。この「関係性」ないし治療構造が成立する過程を洞察するにあたって、著者は、ロムバッハの『構造存在論』の所説、とりわけ「構造」（Struktur）の自己構造化の思想を援用している。

第2章では、ユングの個性化思想の中核をなすのは「自己」（Selbst）論であると仮定され、その「自己」論における特質が、背景となったさまざまな思想潮流の概観を通して考察される。著者によると、意識性の中心である「自我」（Ich）の実現から個性化過程を峻別しているのは、「自己」論を貫いている世界観的な前提にほかならず、したがって、ユングの説く「自己」の構造は、彼の世界観ないし世界解釈の性格を如実に反映したものである。そして、世界に開かれて在る「自己」の存在論的な構造に基づいて、個性化過程は、「自己」の本来的な在り方の自覚、すなわち世界の自覚の過程として成立することになる。こうした「自己」論ないし個性化論の由来は、ドイツ・ロマンティックの精神的系譜のうちに求められうが、その源流をさらに遡ると、中世錬金術（たとえばパラケルスス）、ネオ・プラトニズム、グノーシズム等、いわば「深層の精神史」に到達する。「自己」理念の成立に伴うこのような歴史的経緯をふまえつつ、著者は、正統と異端（異教）との交錯の徴表、すなわち「ミサ」に関するユングの解釈を取り上げ、そこ

から、「元型」(Archetypus)的存在としての「自己」の構造について考察している。

第3章では、「類型論への関心」という角度からユングの元型論が考察の対象とされ、個性化原理としての元型論、とりわけ母親元型および子供元型の特徴について論究される。ユングが元型論成立の当初(1910-20年代)から類型(集合)性に関心を抱いていたことが指摘され、こうした事態をふまえつつ、存在経験の始源の型(カタチ)(原型・原像)、存在分節化(構造化)の範型、という視点から元型論の意義が捉え直される。そして、さらに、「無意識の集合(類型)性」の思想と「母権」(Mutterrecht)論ないし「太母」(Grosse Mutter)論——1930年代から40年代にかけての学際的関心事(バッハオーフェン・ルネッサンス)——との関係に言及される。

第4章では、分析心理学の治療技法である「能動的想像」(Aktive Imagination)の問題が取り上げられ、根源的自然としての無意識に基づく創造・媒介作用、という視点から、想像力ないし構想力の有する人間形成的な意義が究明される。著者によると、ユングにとって無意識(一存在)は、われわれの内なる自然でもある根源的自然(純粹自然)にほかならず、したがって想像力は、象徴化の働きとして、自然-無意識の形成衝動に即した内的形象の喚起作用である。そして、内なる自然である身体・物質・情念(パトス)等の問題を孕みつつ、構想力の範疇としての元型は、「自然-無意識-想像力」という三位一体の構造を形作ることになる。想像力・構想力に具わるこのような構造は、さらにまた、われわれの内なる他者でもある無意識、すなわち対話論的な契機を含むことによって、個性化過程に弁証法的な性格を与えることになる。

第5章では、先に考察された「能動的想像」の問題が存在論的な方向にもたらされ、「治癒と救済の場所」という視点から、いわゆる「深層的自然」の構造についての問いが展開される。そのさい、「元型」(Archetypus)構造は存在の「始源」(Arché)(深層性)への垂直構造、経験の「範型」(Typus)(普遍性)への水平構造に分節化される、といった仮説が立てられ、そこから、「深層的自然」へ開かれた知の在り方に言及される。著者によると、こうした知の在り方は元型構造そのものの力動性に由来するが、このことを確認するには、パラケルススの自然哲学、とりわけ「自然の光」(Licht der Natur)概念との元型論のかかわりが解明されねばならない。パラケルススの思索こそが分析心理学の先駆的形態なのであり、その中核をなす「自然の光」概念は、「隠れたる自然」の垂直的コスモロジーを開示するとともに、人間の内なる自然(深層的自然)との共鳴的關係に基づいて、根源的自然としての無意識(第一質料)の在り方を照らし出す。こうした「ヘルメス知」に着目することによって、ユングは、臨床的な治療状況、すなわち治療者-患者関係のうちに、自己治癒・自己救済の力の覚醒という「媒介作用」を見出している。

本論文の結論的考察とでも言うべき探求を含む第6章では、人間形成に伴う「心身」の問題が取り上げられ、ユングの個性化論に見られる心身観・生命観の特徴について論究される。そのさい、「治癒」は本来「心身」の合一ないし融合を前提とするものであり、したがって、個性化論は「心身」の相関に対する洞察を欠くことはできない、といった理由から、「挫折した個性化の

試み」でもある「精神分裂病」が主題化される。著者によると、ユングの分裂病論で提示された「分裂病現象」(人格崩壊)は、ブシュケーの生命基盤の侵害、すなわち生命論の領域にかかわる問題をそれ自体のうちに孕む。この問題は、ユング晩年の思索である「類心性」(Psychoid)論の検討を通して追求されるが、その場合「類心性」とは、心・身未分ないし主・客(自・他)未分の存在の場、すなわち心身融合の場所を、いわば微視(ミクロ)的次元で開示する概念であり、ここから、心身の存在構造に関する新たな視点が提示されることになる。こうした視点に治療構造(対人関係)論の観点、すなわち巨視(マクロ)的視点を重ね合わせることによって、著者は、「受肉した精神たる身体」・「深層の身体性」に基づく「治療」の構造を析出している。

第7章は、本論文の構成の上ではいわば「補論」に充てられた箇所であるが、ここでは、ユングの分析心理学の構想に反映された政治的、社会的状況、1930年代・ヨーロッパの時代精神が考察される。まず、分析心理学がいわゆる「深層の自然学」として想定され、ゲーテ自然学とのそれのかかわりに言及された上で、「深層の自然学」に具わる反時代的、脱近代的な性格が、同時代的な状況(とりわけナチズムの運動)に照らして指摘される。そして、「国際精神療法医師会」設立の経緯、ユングへの「反ユダヤ主義」の嫌疑等、政治的性質を伴う問題が、ユングの神経症論(1934年)の解釈をてがかりにして検討される。

終章では、本論文において展開された考察の主旨が章毎に要約されるとともに、ユングの個性化論の有する自然学的、生命論的な意義について補足され、そこから、「教育自然学」という著者自身の今後の研究課題に言及されている。

## 論文審査結果の要旨

ユングによって展開された個性化思想は、これまで精神医学、深層心理学、心理療法等の領域でしばしば取り上げられ、検討されてきたが、その有する教育学的な意義に関しては、いまだ必ずしも十分な理解・確証が行われていない。この点で、ユングの個性化思想を存在論的、解釈学的に考察し、個性化現象の人間形成的な意味に迫ろうとした本論文は、ひとつのきわめて先駆的な試みであると言えよう。

しかし、それだけに、論旨を展開する上での方法論として取り入れられた哲学理論、とりわけ存在論(ハイデガー)、構造(一存在)論(ロムバッハ)、場所論(西田幾多郎)について、これらの理論の特質と相互の関連を詳述していない点が惜まれる。教育学が特定の哲学理論のたんなる応用ではないとしても、著者がこれらの理論を総合的に受け入れ、みずからの方法論としている以上、その経緯に関するさらに立ち入った説明が要求される場所である。

また、個性化の基調をなす「治療」と「自己形成」との整合化について、発達臨床の見地では対立関係(「個人外規制」-「個人内規制」)にあるとも言える両者を、治療実践の契機として具体的

にどう結び付けうるかという点に、何らかの見通しを提示しておくべきであったろう。

しかし、こうした若干の不備が見受けられるにもかかわらず、本論文は全体として優れた特色を具えており、それはたとえば、「能動的想像」、「類心性」(プシコイド)等、これまで必ずしも十分に解明されていなかった諸概念に着目し、そこから個性化論を立体化している点に表われている。さらに、ユングの個性化思想が占める精神的な位置、とりわけパラケルスス、ゲーテ自然学とのかかわりをめぐる論究も、他にほとんど類を見ないものとして高く評価されてよい。

こうした特色からもすでに窺われるように、本論文は、主観-客観、自己-他者、精神-身体等、近代的思考に特徴的な二分法の枠を越え出て、人間形成論の新たな視座、すなわち自然学的、生命論的な地平を切り開こうとしたものであり、この点で、教育学研究の現在と将来に資するところがきわめて大きい。よって、博士(教育学)の学位を授与するに十分な資格があると認定される。